

SY5-5

子どもの育ちを支える病棟保育の実際

柴田 和子

熊本大学医学部附属病院

入院すると、子ども達はこれまでの生活が一変し、閉鎖された空間での制限の多い生活、病気による痛みや苦しみ、検査や治療、家族や友達との分離、外見の変化などの中で大きな不安やストレスを持って過ごさなければいけません。

しかしながら、病気で入院している間も貴重な人生の一部分であることに変わりはありません。病気であっても、子ども達は日々成長しているのです。

子どもにとって「遊ぶ」ことは生活そのものです。入院する子どもにとっても、遊んだり日々の生活に楽しみや季節感を見いだすことは、子ども達の不安やストレスの軽減だけでなく、成長・発達を促すものとして欠かせないものなのです。

治療においては受け身であらざるを得ない子ども達は、遊びの中では、選択できる存在であり、主体となる存在です。遊びを通して家族や友達とのコミュニケーションを通して、子ども達の自律性が養われ、それが病気や人生に前向きに取り組む「力」になると考えられます。

血液や腎臓などの疾患で長期の入院を余儀なくされている子ども達があります。人工呼吸器やクリーンウォールなどで活動に制限のある子ども達があります。

病棟保育士は、それぞれの子どもの体調、年齢、検査や治療のスケジュールを把握し、医療スタッフと相談し合いながら、子ども達と日々遊んだり、季節の行事やイベントに向けての準備、制作を行っています。遊びの場はプレイルームに限らず、ベッド上、処置や検査の場とさまざまです。

また、入院する子ども達だけでなく、その家族も大きな不安やストレスの中にあります。保護者と信頼関係をつくり共に子どもの成長を見守りながら、少しでも安心できる環境を整えることが大切です。

遊びの中で子ども達は、笑顔や言葉、身体の動きなどいろんなかたちで「楽しさ」「自分らしさ」を表現してくれます。

子ども達と病棟保育士との会話には、こんな言葉がよく語られます。「明日が待ち遠しいね」と。

病気の子供達達が「入院していてつらいこともあったけど、あれもできたこれもできた。」と感じられるような入院生活を送れるようにするためには、病棟保育士だけでなく他職種とのコミュニケーション、理解と協力が必要です。

今回、さまざまな立場から「子どもの育ち」を一緒に考える機会をいただき、感謝です。